

平成二十六年

八月

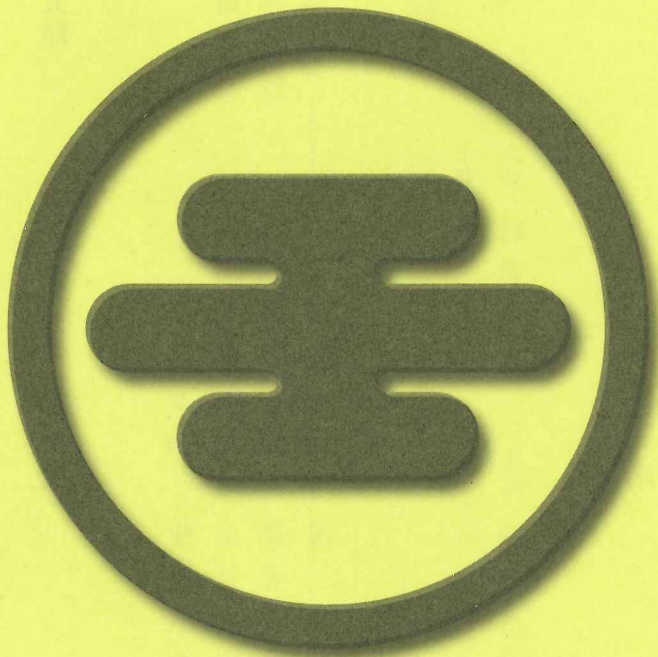
自主公演能

とき 平成二十六年八月二十四日(日)正午始

〈整理券配布・十時三十分、

見所入場・十一時、解説・十一時十五分〉

ところ 十四世喜多六平太記念能楽堂



喜多流職分会

《チケットのご案内》

八月チケット発売開始日

平成二十六年六月二十二日(日)午前十時より

年間優待券

● 十一枚綴り 五〇、〇〇〇円

● 五枚綴り 二五、〇〇〇円

優待券は各職分でも受付をしております。

前売券

● 一般券 六、〇〇〇円

● 学生券 二、五〇〇円

● 学生団体(二〇名以上) 二、〇〇〇円

指定席料 二、五〇〇円

当日券

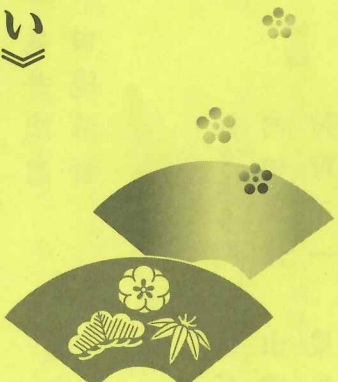
● 一般券 六、〇〇〇円

● 学生券 二、五〇〇円

《お取扱い》

窓口とお電話にて承っております。

(FAX及びメールでのお申し込みは
お受けしておりません。)



十四世喜多六平太記念能楽堂事務局

〈電話〉〇三―三四九一―八八一三

(午前十時〜午後六時)

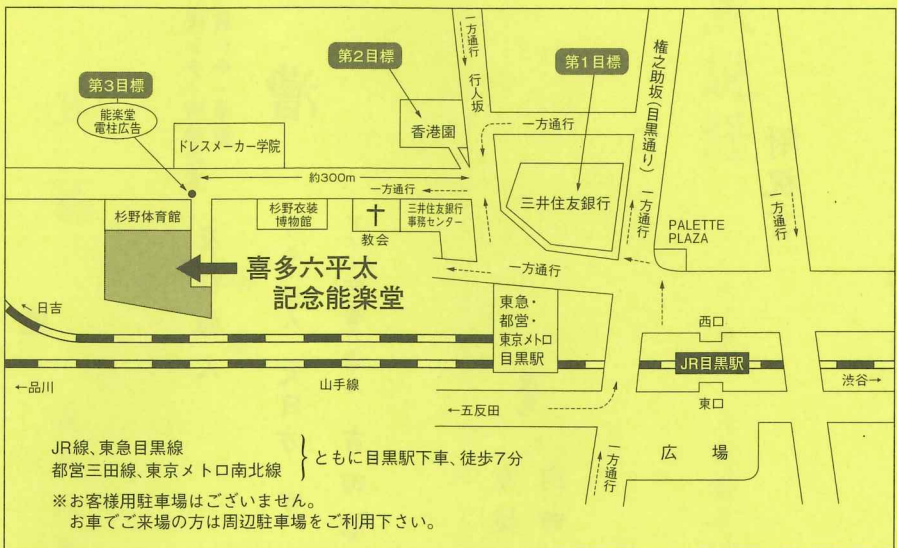
平成二十六年
九月自主公演能予告

平成二十六年九月二十八日(日) 正午始
 十四世喜多六平太記念能楽堂

「経 政」 香川靖嗣
 「蟬 丸」 金子匡一
 「綾 鼓」 内田安信

九月チケット発売開始日
 平成二十六年八月二十四日(日)
 午前十時より

【会場案内図】



【ご注意】

- *喜多流職分会の許可なき写真・ビデオ撮影、及び録音はできません。また演能の妨げや他のお客様の迷惑になる行為もご遠慮ください。時計のアラームや携帯電話の電源は必ずお切りください。なお、迷惑行為を発見した場合や係員の指示に従っていただけない時は退場していただく事もございますのでご了承ください。
- *2階ラウンジ以外でのご飲食は固くお断り致します。
- *自主公演当日は午前10時30分より「整理券（お一人様一枚）」をお配りし、午前11時より整理券番号順に見所へ入場していただきます。
- *チケットは入場前に半券を切り離すと無効になります。
- *座席はお一人様一席です。入場の際手荷物等でお連れ様の座席を取り置く行為は固くお断り致します。
- *公演日によっては、満席になり次第入場をお断りすることもございますので、あしからずご了承ください。
- *公演中止の場合を除き、お申込後のチケットの払い戻し、変更、再発行はいたしません。
- *やむを得ない都合により出演者が変更になる場合がございます。
- *全館禁煙でございます。屋外喫煙所をご利用ください。
- *お客様用駐車場はございません。お車で来場の方は周辺駐車場をご利用ください。
- *貴重品の管理には十分ご注意ください。館内で起きました盗難・紛失につきましては一切責任を負いかねます。

主催 **喜多流職分会**

後援 公益財団法人 十四世六平太記念財団

〒141-0021 東京都品川区上大崎四一六一九

十四世喜多六平太記念能楽堂

電話 (〇三)三四九一八八一三
 ファックス (〇三)三四九一八九九九

八月自主公演番組

●平成二十六年八月二十四日(日) 正午始
●整理券配布・十時三十分、見所入場・十一時
解説・十一時十五分

能

後シテ・夕顔の上の霊
前シテ・里女

大島輝久

半 蔀

ワキ・僧 御厨誠吾

アイ・五条辺の者 大藏千太郎

大鼓 亀井広忠
小鼓 田邊恭資

笛 槻宅 聡

後見

高林白牛口二
塩津哲生

地謡

佐々木多門 佐藤章雄
内田成信 出雲康雅
狩野了一 粟谷能夫
粟谷浩之 長島 茂

狂言

魚説経

シテ・出家 大藏彌太郎

アド・男 小梶直人

休憩 二十分

仕舞

玉 葛

大島政允

地謡

佐藤 陽
塩津圭介
香川靖嗣
佐藤寛泰

能

後シテ・阿漕の靈
前シテ・漁翁

友枝雄人

阿漕

ワキ・旅人 大日方 寛

アイ・阿漕の浦人 吉田 信海

大鼓 柿原 弘和
小鼓 観世新九郎

太鼓 観世元伯
笛 一噌隆之

後見

友枝昭世
内田安信

地謡

友枝真也 谷 大作
金子敬一郎 粟谷明生
高林 伸二 大村 定
粟谷 充雄 中村 邦生

附祝言

(終了予定三時半頃)

《半葩(はしとみ)》

京都の紫野に住む僧が、一夏安居の修行を終え、草花を集めて立花(りつか)を供え、草木の供養を行つてゐる。すると、どこからともなく若い女が現れ白い夕顔の花を捧げて、昔五条辺りに住んでいたと言ひ残して花の陰に消え去る。(中人)僧がその言葉に従つて五条あたりまで赴くと、瓢箪のある半葩戸を下ろした小さな家から夕顔の霊が現れる。光源氏に夕顔の花を折つて白い扇にのせて差し出した縁で光源氏と結ばれたときの話をして舞を舞い、やがて半葩戸の奥に消えて行く。

《魚説経(うおせつきょう)》

摂津国の兵庫の浦に住む漁師が、に

わか出家となり旅に出る。途中で出会つた男は、親の供養のためにお堂を建てたので、住持を探していた。さつそく男は出家を連れて帰り、説経をたのむ。出家は経も法談も知らない。しかしお布施は欲しいので、何とか説経をしようとして、漁師あがりなので魚の名をとりまぜて説経を始める。しばらくすると男も気がついて文句を言うと、なおも魚の名でからかうので、怒つた男に追い込まれてしまふ。

《阿漕(あこぎ)》

日向国から、秋風の中をひとり伊勢神宮の参拜にきた旅人が、阿漕が浦へとたどり着く。そこに来かかった漁翁と言葉を交わし、土地に縁のあ

る古歌などについて話し合う。漁翁は、この阿漕が浦は伊勢神宮に供える魚を獲るための禁猟域であつたが、ある男が毎晩隠れて網を下ろしていたのが露見し殺されてしまった話をし、自分こそがその男であると明かす。すると急に海が暗くなり荒れて燈火も消え果て、弔つて欲しいと恐ろしい叫びを残して闇の中にその男は消え失せた。(中人)旅人が弔いをすると、やつれ果てた顔の阿漕の亡霊が現われ、執心の網を操つて魚を獲る様を見せ、地獄の苦しみを受けるが助け給えと頼みながら再び海の底に消え失せるのだつた。